

JAPAN SOCIOLOGIST

# 新社会学研究

特集 ファン文化の社会学  
公募特集 今、地域を考える

FAIR

FREEDOM

FAITHFULNESS

FRATERNITY

---

2018年  
第3号

---

編集同人  
小川博司 櫻田美雄 栗田宣義 好井裕明 三浦耕吉郎

新曜社

## 創刊の言葉

『新社会学研究』は、今から遡ること百七十年前に「市民社会における不幸に係わる自己認識の科学」として出発した思想としての社会学本来の姿に立ち戻り、通時的には現代日本の文化、ジェンダー、親密圏、教育、エスニシティ、宗教、法律、政治、経済、産業の各所に遍く澱のように潜む矛盾や桎梏の揚棄、共時的には原発震災以降、顕著となった歪められたコミュニケーションによる市民社会分断からの防護等の諸課題に向けて、透徹なる分析に裏打ちされた有意味な批判ならびに、より良き未来を導く豊かな提言を投げかけることを可能とする、社会学の技術と精神の、普及、告知、称揚、涵養、発展、革新を図る学術誌たることを、その使命とする。

好井裕明・三浦耕吉郎・小川博司・樫田美雄・栗田宣義

## 目次

巻頭エッセイ 社会学的に考えることの実践としての『新社会学研究』

——社会学的思考を促す仕組みとしての公募特集とその査読

櫻田美雄

5

## ファン文化の社会学

特集 ファン文化の社会学によせて

小川博司

14

送り手とファンの相互作用

——K-POPの女性ファン文化

吉光正絵

18

「同担拒否」再考

——アイドルとファンの関係、ファン・コミュニティ

辻泉

34

2・5次元ミュージカルのファン

田中東子

50

読者の声 『現代社会学』等と『新社会学研究』

——新雑誌の意義の確認と将来展望

宮本孝二

69

## 連載

くまじろーのシネマ社会学③ 『沖縄決戦』からみえてくるもの

好井裕明

75

極私的社会学②

グループホームで父を看取る(2)

——介護スタッフの実践から見えてくる(本人の意思)

三浦耕吉郎 79

論文投稿と査読のホントのところ③

学会をブランディングするための装置としての論文査読システム

査読ア太郎 91

ネコタロウに聞け! 社会学者スーパースター列伝④  
テンニエス

栗田宣義 101

今、地域を考える

公募特集によせて

好井裕明 103

うわさと「疑いの世界」

——マニラにおけるインフォーマル居住者の強制撤去と展開過程

石岡丈昇 104

社会と関わる芸術にとつての地域

——対立から包摂へ

高橋かおり 125

炭鉱の閉山を巡って交錯するリアリティ

——「後始末」に携わった人々の半生から

坂田勝彦 145

住むことも住まないことも資源にする

——未確定希少難病患者の移住に関する一事例研究

上野 彩 166

ネコタロウに聞け！ 社会学者スーパースター列伝⑤  
リブセット

栗田宣義

190

ビデオで調査をする方法③

ビデオで調査をして当事者研究的社会学調査を行う

榎田美雄

192

ファッション&ファッション③ ファッション系統とその性格

栗田宣義

198

同人書評

206

ネコタロウに聞け！ 異書・外伝篇③ AIの叛乱ならぬ氾濫

栗田宣義

213

読者の声

(気が早い)アーカイブ化への期待

井口高志

215

〈生きる力〉を支える社会学

松浦智恵美

216

編集後記

217

## 社会学的に考える『新社会学研究』

——社会学的思考を促す仕組みとしての公募特集とその査読

榎田美雄（神戸市看護大学）

1 経済学 vs. 社会学——NHK『出社が楽しい経済学』をネタにして考える

「出社が楽しい経済学」(の一部)を、「社会学(共通教育)」の授業で使っている。この番組は、二〇〇九年にNHK

教育テレビジョンで放映されたものが、二十八分の番組のなかに、その日のテーマを題材にした「夜の本格経済学ドラマ」が前後編合わせて二篇含まれており、これが喜劇仕立てでなかなか楽しい(劇団スーパードキセントリックシアターの役者たちが出演している)。授業では学生と一緒に笑いながらその部分を見て、補足事項を解説しながら八十分ほど過ごす

が、番組のさいごに、「本日の復習」という三択の「クイズ」部分があつて、そこで「おさらい」ができる構成になつて

いる。この「おさらいクイズ部分」の答えは、NHKのホームページに載っているのだが、解答に違和感を持つこと、納得できないことがときどきある。たとえば、第九回の「共有地の悲劇」では、登山客が増えたことによる「富士山の環境破壊」を「共有地の悲劇」の事例として紹介したうえで、「共有地の悲劇の解決策ではないものは次のどれか?」と問いかけている。しかし、提示されている三

つの選択肢(①入山規制、②登山税、③有料公衆トイレの整備)を、十分な猜疑心を持って考えると、社会的には「どれも選べる」ともいえるし、あるいは、「選べる選択肢はない」ともいえるように思われるのである。

一つずつ考えていってみよう。①や②の解決策は、それが十分効果を持つかどうかに関して、まず疑義がありうるだろう。一〇〇円程度の登山税には、たぶん、効果はない。また、同じく登山税に關しては、高くしたら高くしたで、「金を払っているのだから、これぐらいのことはしてもよいだろう」という形の、環境保全に逆行する方向での行動変容が促されてしまう可能性も無視できないように思われる。各政策は意図を持つて行われるのだから、その意図どおりの行動が実際になされるかどうかは、また別問題なのである。このクイズはその政策意図と実際の状況変化との異同について、どのように考えているのだろうか、いぶ

かしく思われた。さらに、③に関していえば、十分な額のトイレ料金を設定すれば、ヘリコプターで屎尿処理をすることも可能になり、山肌の紙流れを無くすることもできるだろう。それなら、環境破壊を減らすことに成功したという意味で、共有地の悲劇の解決策になるようにも思われた。

にもかかわらず、NHK側が提示している答えは、③のみであった。理由は、「過剰利用の抑制ではないから」であった。つまり、いろいろ疑義はあるかも知れないが、①や②が「利用者数の減少が期待できる施策」であるのに対し、③が「利用者数の減少を志向していない施策」であるがために、③のみが解答である、というのである。社会学者には納得しがたい理路であるといえよう。

この「クイズ」に対する榎田の違和感とは、「過剰利用の抑制のみを問題の解決とする近視眼的な問題理解」になっていくことへの違和感であった。おそらく社

会学的には、「過剰利用が問題なのではなく、供給不足が問題だ」ということも可能なのである。これを「前提を疑う志向性が強い社会学」対「前提を置いた上で計算で問題解決する志向性が強い経済学」と対比することもできよう。すなわち、『出社が楽しい経済学』という番組名の下では、③のみが「共有地の悲劇の解決策ではないもの」とされるのは、ある意味で当然なのである。そこには「前提をどこまで疑うかどうか」ということに関する「態度の違い」があるのである。つまり、経済学的思考と社会学的思考の間には「遡及的に問題把握する際の深度の違い」がある。「あー、こんなところに違いがあるんだ」と感じた事例であった。

## 2 別様の思考法に開かれている学問としての社会学

ときどき、法政大学の中筋直哉氏のブログ『群衆の居場所』を見ている。じつ

くり読むと影響されすぎてしまうので、タッチ&ゴーで、ちょっとだけ見て、刺激だけ受けて、あとは見ないようにしているのだが、いつも感心するのは、書かれている文面の質感がとっても「社会的であること」だ。微妙なあわいで、社会学と社会学でないものをより分けている感じがいい。社会学的に書くというところを、内容に依存させてではなく、文章の質感に根柢を持たせる形で、しっかりと実践しているのである。だから、気になった回のブログは、コピペして、書きかけの論文用の「素材保管フォルダ」に保存しておく。そうして、自分の原稿を書く際に、ちょっと飽きたら見たり、考えたりするようにしている。そのようにすると、自分の原稿に、ほんのりと社会学色がつくように思われるのである。

それで、今日も、中筋氏のブログ中の「社会科学の一平民…社会学的思考の基礎3」(二〇一七年十一月一日投稿)を見て、この原稿を書いているのだが、今日は、

ちゃんと引用することしよう。上述の「共有地の悲劇」からの感慨に、内容に関係しているブログ内記事だからだ。

まず、中筋（以下敬称略）は、敬愛する年長の同僚（たぶん、社会学以外の社会科学者）から「社会学は問題の発見に優れ、経済学は問題の分析に優れ、法学は問題の解決に優れているのだから、そのシリーズで連携できるといいね」と言われたという。そして、「その通りだと思いつながら、一方でそれはきわめて（近代）経済学な思考法だな、と」その先輩の「諸社会科学は役割を分担したらいんだよ説」に対して批判的な眼を向ける。そして、「現実的な要素を組み合わせて（加重平均的に足し上げて、あるいは分業して）最適解を出す、出せるはずだというのが、私の見るところ経済学的思考なの」だと、つまりは、同僚の思考の全体を「経済学的思考」であって、社会学には別の思考があるのだと、対比的に、類型化していくのである。

さて、ここからは、私の思考である。上述の『出社が楽しい経済学』では、番組内での「共有地の悲劇」の認定においては、「過剰利用」が原因で、「経済的損失」が結果であった（社会的ジレンマ）の形で記述するならば、各自が自分の利益を最大化しようとする、少なくとも、全体の利益は損なわれる、という形のメカニズムがあるというような感じになっていた。たとえば、牧草地の疲弊は牛が多すぎることが原因とされていたし、道路の渋滞は、自動車が多すぎることが原因とされていた。けれども、社会学なら、別様に考えることができるのではないかと、思われた。牧草地が不足したのなら、新規に開拓すればよいではないか。道路の渋滞は、道路を増やしてもよいし、あるいは、渋滞するに任せて置く手もあるだろう。渋滞は、一種のビルト・イン・スタライザーとして自動車の数が増えすぎないようにする自然発生的機能をもっているともいえるのではないだろうか。

つまり、「共有地の悲劇」的な「原因-結果」理解は、この世に存在している社会問題に関して、当該の社会問題の解決策をあらかじめ「過剰利用の抑制」に限った形で理解した場合にのみ適切となる理解の形（言明）といえるのではないだろうか。

たしかに、そこから始めることができる「社会学」というものもあるだろう。社会的合意の取りやすい「規制の仕方」を検討したり、入会地同様の利害共有集団作りをしていくのに貢献する社会学というものもあるだろう。けれども、「社会学の可能性」の中には、「過剰利用の抑制」という「前提」を採用しない立場からの社会学というものもあるように思われるのである。

つまり、近代的な「計算可能性」の外側に問題を開いていく潜在的能力が、社会学にはあるはずなのだ。社会の多側面性の把握をした社会学には、経済学や政治学の前提を超えて考える資質があるは

ずなのだ。

しかし、この「社会学の思想的可能性」を、「前提を疑い続ける力」とか、「機能不全になったシステムに関して、より広域的な思考をすることで、機能的な再統合を図る力」というようなポジティブな形で、定式化してよいのか、という問題がここに生ずる。別様に考えることができたとしても、その別様の考え方が、「誰かの利益になる」とは限らないし、そもそも別様に考えた方が「再統合に有用」なのかどうかすら、分からない、のだから。

### 3 前提遡及的に問題把握する深度の違いで、社会学を特徴づけることは可能か

つまりは、社会学帝国主義の立場をとるかどうかが、問われているのである。たしかに、政治学や経済学のような、探究する対象をもった社会科学に対して、社会学は研究対象を持たないメタ的な社

会科学である。この個別の研究対象を持たない「社会学」には、そういう学問にしかできない活動が可能ではあるだろう。たとえば、ここまで論じてきたように、他の学問分野が、議論の前提として組み込んでいる「前提」を疑う思考こそは、「社会学」が得意とするものである。「社会学」が結局のところ「ホモ・エコノミクス」的人間観から離脱できないのならば、社会学は、その前提の外側で議論を立てることができるのである。

けれども、この「社会学の特権性」に「実」はあるのだろうか。「可能性」に固執したところで、「可能性はついに可能性に過ぎなかった」といわれてしまいかねないのである。社会学者の現場志向や生活者志向は、この「社会学の特権性」にあぐらをかいて現実から遊離してしまうことへの「不安」から来ているもののようにも思われるのである。つまりは、「前提遡及的に問題把握する深度の違いで、社会学を特徴づけるこ

と」は、それだけで、社会学をしていると主張することは、とても怖くてできないことなのである。

結局、社会学の自由さは、社会学の不自由さでもあるのだろう。いかようにも考えていける、という社会学の可能性の広さこそが、経験的に考えるべきだという枠組から我々が離脱することを（理不尽にも）困難にしているのである。警句的にいえば、社会学は自由すぎるから不自由になってしまっているのである。

上記の状況を与件とするならば、この不自由さを巧みに生きることこそが、社会学をすること、といえるのではないだろうか。そうでなければならぬわけではないが、微妙なところで、実践性や経験性を確保しながら、その一方で、いろいろと自由に考えていく、そういう研究への態度を工夫して維持していくことこそは、社会学を実践的に生きていくという言葉に価することなのではないだろうか。

#### 4 『新社会学研究』を刊行すること

で、我々は何をしているのだろうか  
論題に向かつて、議論を先に進めよう。じつは、ここまでの議論は、我々同

人の「自己省察」の一部としてなされている。つまりは、ここまでの議論は「社会学とはなにか」「社会学をすることはいかなることなのか」「社会学を実際におこなっていく現場では、どんなことが起きてしまうのか」という三つの問いに答えようとするものであったのだが、この検討は、『新社会学研究』のための検討であるとうじに、我々が開催した『新社会学研究』合評会」の中で議論された内容でもあるのである。

我々五名の同人は、この半年の間に『新社会学研究』の合評会を、大阪（二〇一七年十二月一日）と東京（二〇一八年六月九日）で一回ずつ開催した。<sup>1</sup> これらの合評会は、それぞれ三人ずつの登壇者に、本誌に関わる評価を述べてもらい、あとは、報告への質疑応答とフリーデー

スカッションで、『新社会学研究』が達成できたことと、達成できていないことの両方を確認していく、というものだった。

いずれの会においても、登壇者の力のこもった報告で会は盛り上がったが、その一方でいくつもの疑問が、本誌に向かつて語られた。すなわち、『新社会学研究』といっているが、伴走誌であると主張している『社会学評論』とどのよう違うのか』『新社会学研究』の方向性には、ノスタルジックなものがあり、『新』ではなく『旧』なのではないか』『公募論文の査読は、結局、水準確保型であって、北条かや氏の著作を先行研究ではなく、資料として扱うように、と指導している部分などは、従来の学問観のまま、その押しつけをしているのではないか』等々の疑問が語られた。

質疑応答のなかで、その質問は予想していました、という質問もあったが、むしろ、初めて考えさせられるテーマや、

初めて気づかされる内容も多々あった。

回答においては、まず、『社会学評論』との質的違いに関して答えた。本誌は、学会誌ではないので、連字符社会学別の棲み分け構造（縦割り構造）からは自由であること。『評論』ほどの歴史と伝統はないので、思い切った試みを多く実施することができると等々を述べた。また、上述の「思い切った試み」の例として、一号巻頭の特集を挙げることできるだろう。そこでは、表現形式の冒険が多く試みられており、チャレンジングだった。また、公募特集の方では、領域横断的なテーマ（生きづらさ、生活者）を掲げることで、縦割りのではない論考を積極的に発掘できており、こちらも『社会学評論』との差異化という観点からみた場合、成功部分であったといえるように思われた。

ついで、「懐旧趣味なのではないか」という問いかけに関しては、「そのような回路を経由するしか、目標に近づくや

り方を思い浮かべなかった」(大意)と回答をした。たしかに、『現代社会学』誌を強く意識し、同誌での社会学の論じ方、すなわち、社会学全般に関係するものとして個別のテーマを論じていく姿勢をまねてはいるが、そういうやり方しか、思いついていないのである。二回目合評会の天田城介氏からは、WEB上での工夫の可能性に関しての示唆も受けたが、社会学の総合性を目に見えるものにするには、まだまだ紙媒体の方がインパクトがあるのではないだろうか。そのように回答をおこなった。

ここまでの部分は、なかば想定していた問いかけだったが、最後の(『合評会 in 東京』の第三報告者である中村香住氏宛の)「査読の進め方」に関しての質問は、想定外であった。すなわち、2号所収の中村論文(「フェミニズムを生活者の手に取り戻すために」)の査読プロセスにおいて、「もし北条かや氏の諸著作が学術的著作の水準に達していないのならば、そ

れら諸著作を先行研究として取り扱うことはやめた方がよいのではないか」(大意)という示旨が主任査読者からあり、その示旨に中村(以下敬称略)がしたがった、という報告に対し、「そのような、査読側からの判断基準の強制は、新しい雑誌」という『新社会学研究』のコセプトに反するのではないか、という指摘がフロアからあったのである。この質問のインパクトは大きかった。そして、結局、社会学とはなにか、社会的に考えるとはどういうことか、という問題について、考えながら書き、かつ、答えるべき問題であるように思われたのである。

### 5 『新社会学研究』の「査読」と「査読 ア太郎論文」との重ね合わせの説明

査読に関しては、雑誌としての公式見解ではないものの、『新社会学研究』誌には査読ア太郎による「論文投稿と査読のホントのところ」という連載があっ

て、この連載の記事内容と、雑誌の査読の実際がどの程度、どのように関連しているのか、という点は、当然に本誌についての検討課題となるだろう。そのように考えた時、この検討に役に立つ記述が、『現象と秩序』八号掲載の松浦智恵美論文中にある(松浦氏は、大阪での一回目の『合評会』の登壇者のうちの一人であり、このハイブリッド誌に掲載された論文は、『合評会』原稿の改訂版である)。

松浦は、以下のように述べている。松浦が主として言及しているのは、ア太郎の連載の一回目であるが、そこでの問題は、「査読者が投稿者からの刺激を受けた結果として出してしまう成果の方が、元の査読論文が公表されるよりも前になっってしまうような微妙な問題」であった。けれども、松浦のまとめによれば、この一見して典型的な「利益相反問題」は、「監視」と「規制強化」という通常の解法とはまったく異なる、別種の解法によって処理されている可能性がある、

という主張がア太郎によってなされているのである。命名するなら、「倫理問題の文化的解決」といえるような解決が実践的になされているというのである。といったかどうか。謎解きのストーリーは以下のとおり。

じつは、ア太郎論文では「査読者の成果が先行して公になってしまふことに関して、発想の元になった投稿者の論文の掲載を邪魔立てして、学問的アイディアの占有や第一想起者の権利を獲得しようとしたと思われたくない」と「多くの査読者は考えているだろう」という考察がなされていると、松浦は指摘するのである。

つまり、ここでア太郎が行っているのは、「社会学的思考」であるといえよう。なぜなら、このエッセイの第一節で、「共有地の悲劇」に関して主張した構図である「経済学 vs 社会学」を流用して説明をするのならば、ア太郎は、「査読における利益相反問題」を、単純な「ホ

モ・エコノミクス」的アクター観ではない、「文化モデル」で考えることができる、と主張しているからである。

そして、この枠組的転換こそが、ア太郎論文の意義であると考えられるのなら、『合評会 in 東京』の「査読」に対しての質問も、質問者が想定しているのとは違った枠組で答えることが可能になるのではないだろうか。すなわち、投稿者の権利を侵害する査読実践であったかどうか、という観点ではなく、投稿者とともに社会学上の新しさにチャレンジする査読実践がなされていた可能性に留意して、そのチャレンジが十分チャレンジングなものだったかどうか、という観点で、査読プロセスを検証するような議論を、対抗的に提起するような枠組設定が可能となるのではないだろうか。そのように思えるのである。

## 6 おわりに

四節末から五節に掛けて取り扱った

「質問」は、じつは、もっと厳しいものだった。『新社会学研究』第一号の「巻頭エッセイ」は、小川博司によるものだが、そこには以下のような記述がある。「目前の現実の問題を解決するためのピースミールな改革に役立つような成果を出すことこそ社会学の使命とばかりに、地道な実証的な研究が続けられている。現実問題として、査読に通じやすいのはそのような研究であり、『大きな物語』にかかわる論文は、査読には通りにくいし業績にならないのだ」(小川 2016: 10) という、社会学の現状を批判的に考察した記述だ。合評会の質問者も、登壇した奥村も、ここに注目して発言していた。それはつまり、同人たちの振る舞いが、「ピースミールな改革に役立つような成果」を出すことに志向していた、小規模改革的なものになってしまっている面を持っているのではないかと、という自省を促す発言だったといえよう。

残念ながら、我々はその批判の半分ぐ

して頂ければ幸いです。

### 〔注〕

〔1〕以下のとおり、第一回合評会と第二回合評会は開催された。

「第一回『新社会学研究』合評会の記録」(参加者数・十一名)

開催日時：二〇一七年二月一日  
(金)一八・三〇～二〇・三〇

開催場所：関西学院大学大阪梅田キャンパス一〇〇二室

登壇発表者：宮本孝二(桃山学院大学)「『新社会学研究』雑感——若干

の雑誌体験から」、井口高志(奈良女子大学)「社会学と雑誌(同人誌)の

愉しみ」、松浦智恵美(立命館大学)「『新社会学研究』第一号に関するコメント」

司会者：三浦耕吉郎(同人・関西学院大学)、樫田美雄(同人・神戸市看護大

学)

「第二回『新社会学研究』合評会の記録」(参加者数・十六名)

開催日時：二〇一八年六月九日(土)

一〇・〇〇～一二・三〇

開催場所：武蔵大学江古田キャンパス一〇〇二教室

登壇発表者：天田城介(中央大学)「歴史的・時代的文脈における『新社会学研究』の位置」、奥村隆(関西学院大学)「誰のための社会学か——

生の現場と不幸の理論」、中村香住(慶應義塾大学)「公募特集執筆当事者

からみた『新社会学研究』」

司会者：好井裕明(同人・日本大学)、樫田美雄(同人・神戸市看護大学)

なお、これらの合評会における報告のうち、第一回の宮本報告は、『新社会学研究』第3号(本誌)に掲載されている。また第二回为天田報告と奥村報告は、『新社会学研究』第4号(次号)に掲載の予定である。また、第一回の井口報告と松浦報告に関連した「短文エッセイ(それぞれ「気が早い」アーカイブ化への期待」と「生きる力」を支える社会学」という題名が付けられている)が、『新社会学研究』第3号(本誌)に掲載されている。

らしいは甘んじて受けなければならぬだろう。我々として、代案(大きな物語)を持つていくわけではないのだ。このやり方は違うかも知れない、もっと別のやり方があるかも知れない、と思いつつ、雑誌をつくっている。けれども、雑誌をつくるという実践のなかで「解決」が産み出されてくる、ということもあるのではないだろうか。公募論文の査読プロセスを見ていて思うのは、人間の反応はじつに多様だ、ということである。査読主任の想定を超えた再構成がなされて、論文の第二稿が届くこと、第三稿が届くことがままある。この「期待外れ」に期待する力こそ「社会学の力」なのではないだろうか。それは、単なる空想力ではなく、様々な工夫を伴う実践力としてありうるように思われるのである。つまり、本誌は実験誌である。とりわけ、本誌の公募特集部分には、本誌の可能性と境界の両方が集約的に現れている。各論文を産み出した査読システムごと、熟読玩味

【文献】

松浦智恵美、二〇一八、「雑誌評：『新社会学研究』」、「現象と秩序」八・六七―七八。（雑誌サイト上にて、PDF ファイルを公開中）

宮本孝二、二〇一八、「現代社会学」等と『新社会学研究』『新社会学研究』三・六九―七四。

中村香住、二〇一八、「公募特集執筆当業者からみた『新社会学研究』（『新社会学研究』合評会。in 東京、二〇一八年六月九日、ミメオ、武蔵大学）

中筋直哉、二〇一七、「社会科学の一平民：社会学的思考の基礎3」『群衆の居場所』（ブログ）（<http://nakasuji.wv.hosei.ac.jp/wp/?p=1116>）

NHK、二〇〇九、「共有地の悲劇」（『出版社が楽しい経済学』第九回）（二〇〇九年三月十四日二二時〇〇分～二二時二九分放映、NHK教育テレビジョン）

小川博司、二〇一六、「巻頭エッセイ 社会学と芸術」『新社会学研究』一・七―一四。

奥村隆、二〇一八、「誰のための社会学か——生の現場と不幸の理論」（『新社会学研究』合評会 in 東京、二〇一八年六

月九日、ミメオ、武蔵大学）

査読ア太郎、二〇一六、「論文投稿と査読のホントのところ①」『新社会学研究』一・八〇―八九。

好井裕明・栗田宣義、二〇一七、「『新社会学研究』がめざすこと」『週刊読書人WEB』（二〇一七年二月三日）（<https://dokushojin.com/article.html?i=801>）

# 特集 ファン文化の社会学によせて

小川博司（関西大学）

ポピュラー文化研究は長らく人気の説明に動しんできた。なぜあるコンテンツがポピュラーであるのか（人気があるのか）、オーデイエンスの意識と結び付けて考察されてきた。ここではオーデイエンスはあくまでも与えられるコンテンツを受容する存在と見なされていた。だが、ここ十年ばかりの間に、アクティブなオーデイエンス、すなわちファン・コミュニティ、ファンの能動的な読み、ファンの積極的な行動（ライブにおける参加、SNSを利用した情報発信など）が注目されるようになってきた。そして、作り手側もこうしたファンの動向に対応する形でコンテンツを送り出すようになってきた。実際、ファン文化は作り手側とファンとの相互作用の中で作られている。

日本における本格的なファン研究の成果としては、二〇〇七年に出た『それぞれのファン研究——「an a fan」応援・サポート・人助けの風俗』がある。前者は、コミックマー

ケット、「二次創作」、ゲーム、総合格闘技、宝塚、ジャニーズ系アイドルと、さまざまな領域におけるファン文化のあり方を論じている。後者は応援・サポート・人助けという括りでファン文化の隣接領域を扱い、ファン文化研究への別な角度からの視点を提示している。その後、個別のファン文化に絞った研究が続々と発表されてきている。二〇〇七年から十余年が経過し、「それぞれのファン」文化の最前線を確認するとともに、「それぞれ」を越えたファン文化研究へのステップを踏み出す時期が来ているように思われる。

本特集では、このような認識のもと、まず、今日のファン文化のいくつかの新たな局面に着目し、それを踏まえた上でファン文化研究の理論的フレーム構築を試みる。ファン文化の新たな局面とは以下の三点である。

- ① ファン文化がコンテンツの提供側とファンとの間の相互作用により作られるのだとすれば、それはどのように作られているのか。
- ② ファンによる対象の「愛で方」はどのように多様化しているのか（例えば、アイドルを疑似的な恋愛対象として位置づける場合だけでなく、複数のアイドルの関係性を楽しむ場合もあるし、ファン同士の間関係を楽しむ場合もある）。
- ③ コミック・アニメなど2次元から派生したコスプレ、声

優、声優歌手、舞台上演など「2・5次元」におけるファン文化をどのように考えるか。

具体的には、①については、吉光正絵氏が主にKポップファンの最新動向を中心に、Kポップの制作サイドとファンとの相互作用を中心に考察する。Kポップの場合、韓国内のマーケットが日本に比べて小さいため、国を挙げてグローバルに通用するコンテンツを送り出そうとしてきた。韓国のKポップファンはアイドルを送り出す事務所に対して強い意思表示をし、事務所側もこれに対応するという相互作用の中で、独特のKポップ文化が形成されてきた。韓国のKポップファンは、ファンの能動性という点において、先駆的な存在とみることができる。

②については、辻泉氏が主に日本の男性アイドルグループのファン・コミュニティの人間関係について考察する。辻氏は日本のジャニーズファンのコミュニティにおいては、同じアイドルのファン（担当）は同じファングループに入れないという「同担拒否」という現象があることをアカデミックな論文で最初に指摘した研究者である。本号特集では、「同担拒否」研究の経緯とともにその後の研究の展開について論述する。

③については、田中東子氏が2・5次元アイドルのファン

について考察する。2・5次元アイドルとは、もともとアニメファンがアニメの声優のことを指す言葉だった。現在ではアニメに出演はしていないが2・5次元ミュージカルの出演者にまで拡大されている。2・5次元ミュージカルとは「2次元の漫画・アニメ・ゲームを原作とする3次元の舞台コンテンツの総称。」（一般社団法人日本2・5次元ミュージカル協会ホームページ）とされている。漫画やアニメのファンと舞台のファンとの境界に位置する新たなファンの実態が明らかにされる。

以上の寄稿論文から今日のファン文化の特徴として三点あげることができる。

第一に、今回の三本の論文では、ファンが享受する対象はKポップのアイドル、日本の男性グループアイドル、2・5次元アイドルと、パフォーミング・アート分野のアイドルたちである。第二に、これらのファンは共通しておおむね女性である。第三に、これらファン文化はSNSなどインターネットを利用したコミュニケーションにより支えられている部分が大きい。

ここから、今後の研究課題として以下のような論点をあげることができる。

第一に、ここで取り上げられた対象は広い意味でのファン文化研究の一部にしかすぎない。広義のファン文化研究の射

程と課題を整理しておく必要がある。本特集では、パフォーマンス・アートのファンの考察が主となったが、一口にパフォーマンス・アートといっても、クラシック音楽、ロック、演劇、ミュージカル、お笑い、幅広い。これらの領域にもファンがいる。隣接領域としてスポーツもある。スポーツの場合は、ファンは応援団、サポーターと呼ばれることもある。また、アニメ・マンガ・ゲーム・映画・テレビ・音楽・ネットといったコンテンツ文化にもファンはついている。パフォーマンス・アートとコンテンツ文化とは、おのずからビジネスモデルが異なってくるし、ファンの行動様式も異なってくる。近年、アニメの声優がライブをするなど、コンテンツ文化がパフォーマンス・アートと融合する動きも見られる。

これらのファンの多くはモノのコレクターでもある。コンテンツ文化のファンだけでなく、パフォーマンス・アートのファンも、パフォーマンスに関連するモノのコレクターでもある。カメラ、切手、昆虫などを熱心に収集しているコレクターは以前から存在している。缶コーヒの缶、牛乳瓶のふた、鉄道の発車メロディーなど、マニアックなモノのコレクターもいる。ファンとしての活動におけるモノの収集のあり方・意味についても着目していく必要があるだろう。

第二に、ファンとその対象との関係について、経済的な支

援という視点から整理する枠組みを検討していく必要がある。ファンとその対象との関係について経済的な支援の度合いから整理すれば、(a) パトロンのように対象に経済的に直接支援をする場合、(b) チケットや関連する商品を購入することにより対象を経済的に支援する場合、(c) 対象の存在を自発的に宣伝することにより(めぐりめぐって)対象を経済的に支援する場合、(d) 公演や試合に出向き声援を送り対象を鼓舞する場合、(e) 対象への影響を考慮せず自らの満足を重視する場合などの段階が考えられる。これらは必ずしも一元的な尺度ではなく、これらのいくつかが複合する場合もあるだろう。ファンの隣接概念、パトロン、タニマチ、サポーター、応援団、ヲタク(オタク)、コレクター、マニアなどは、このような枠組みにより、整理できるのではないか。

第三に、ファンとファンが愛でる対象との関係について、ジェンダー、セクシュアリティの視点から整理しておくことも課題となる。これまでファン文化研究の多くは、漠然と異性愛(ファンと愛でる対象との「疑似的」異性愛)を前提に行われてきたように見える。もちろん、マッチョなロックミュージシャン(cock rock)を支持する男性ファン(Enth [1981=1991])、マドンナのようになりたいたいという少女ファン(wannabes)という異性愛を前提としないアーティストと

ファンとの関係があることについても指摘されてきた。マドンナや宝塚歌劇のファン研究のように、異性愛だけではない多様な読みをするファン文化研究も行われてきている。今後はLGBTを射程に入れたファン文化研究が望まれる。

最後に、ファン文化とその外側の社会との関係について熱心なファンにとっては、意識の面でも費やす時間の面でもファン活動が生活の多くの部分を占めている。しかしそうだととしても、どんなファンでもファン文化の外側の社会にかかわっている。ファン活動以外の時間に、どのような社会生活を送っている人がどのようなファン活動を実践し、ファン文化を作り上げているのか、これを明らかにすることこそファン文化の社会学の課題だろう。

本特集では、現在もつともアクティブなファン文化が考察されている。本特集が「それぞれのファン」文化研究をより推し進めるとともに、ファン文化が「それぞれ」を越えて、今日の社会においてどのような意味をもっているのか理解するきっかけになることを期待したい。

#### 【注】

「1」コンテンツ文化史学会のホームページには、コンテンツ文化としてこれらの項目が例示されている (<http://www.contentshistory.org/about>)

contentshistory.org/about) 二〇一八年六月二十六日)。また、通商産業省のホームページで公開されている「コンテンツ産業政策について」では、コンテンツの例として、「映画・アニメ・TV番組・音楽・ゲーム等」が挙げられている。( [http://www.meti.go.jp/policy/mono\\_info\\_service/contents/downloads/files/180514syokanzikou.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/contents/downloads/files/180514syokanzikou.pdf) 二〇一八年六月二十六日)

#### 【文献】

東園子、二〇一五、『宝塚・やおい、愛の読み替え——女性とポピュラーカルチャーの社会学』新曜社。

Frith, Simon, 1981, *Sound Effects: Youth, Leisure, and the Politics of Rock'n' Roll*, Pantheon. (一九九一、細川周平・竹田賢一訳、『サウンドの力——若者・余暇・ロックの政治学』晶文社)

現代風俗研究会編、二〇〇七、『応援・サポート・人助けの風俗』(現代風俗研究会年報)新宿書房。

宮本直美、二〇一〇、『宝塚ファンの社会学——スターは劇場の外で作られる』青弓社。

Schwichtenberg, Cathy, 1992, *The Madonna Connection: Representational Politics, Subcultural Identities, And Cultural Theory*, Routledge. (＝部分訳一九九四、久木葉一訳『マドンナ・コネクション——誘惑・倒錯・破壊・イメージ操作』ディーエイチシー)

玉川博章・名藤多香子他、二〇〇七、『それぞれのファン研究——I am a fan!』風塵社。

# 送り手とファンの相互作用

——K-POPの女性ファン文化

吉光正絵（長崎県立大学）

## 1 女性ファン文化への視点

1-1 メディア生態系の変化によるファンの見直し

女性ファンに対しては批判的な視線が注がれてきた。コンサートで金切り声を上げるのは、社会的な孤立に由来するヒステリーや若気の至り、群衆行動への感染のためであると考えられてきた (Ross & Nightingale 2003=2007: 123)。しかし、時代が下がるにつれて肯定的な視点が、男性アイドル・グループの欧米版であるボーイバンドのファンたちに関する研究成果等で発表されてきた。Brabazon によれば、ボーイバンドは、ポピュラー音楽産業を支え続けてきた女性たちにとっての福音であり、新世代のジェンダー規範や社会性を取り図を提供する存在である。女性たちはファン活動を通して人生の統御感を手に入れ自分たちの人生を力づけてい

る (Brabazon 2012: 5)。こうした見方は、メディア生態系の変化によるポピュラー音楽を巡る生産と消費、コミュニケーション過程の変化と深い影響関係にある。Hodkinson によれば、かつては送り手から受け手まで直線的かつ一方向的だったメディア・コミュニケーション過程は、現在では、双方向のかつ広大な社会的・文化的コンテクストの中で双方向的になった (Hodkinson 2011: 11-12)。Duffett によれば、インターネットの普及によって、ポピュラー音楽は無料の環境資源になり、受け手の選択肢は増大した。そして、自らを海賊、パトロン、プロモーターとみなすファンたちは、ソーシャルメディア上で他のファンたちとの情報合戦に熱狂し膨大な情報の流れによって自分たちの存在を誇示している (Duffett *op. cit.* 2012: 3)。送り手は、利益を得るためにファンたちの声を必死にかき集めて応答し、ファンたちと送り手の相互作用によってメディア生態系自体が進化していく。注目度が高いコ

コンテンツを検索上位に表示するインターネットの検索サイト  
の特性によって注目度の高いものの一人勝ちの様相も強ま  
る。そのため、人数の多いアジア系の女性ファンたちがメ  
ディア生態系の進化に与える影響力が大きくなっている現状  
がある。

## 1-2 草の根の媒介性への注目

現代社会では、国境を越えた巨大なブームを引き起こすメ  
ディア作品の多くは、トップダウン的なグローバル化された  
メディア産業の営為とマイクロで草の根のファンたちの日常  
的な活動の融合によって拡散がとまらなくなった場合に生  
じる。Jenkins によれば、この「草の根の媒介性」は、現在  
では市場論理の一部になっている。企業利益と一致してい  
る場合もあるが、あくまでファンたちの自発的な動きなの  
で、企業と対抗する場合もあり懐柔されているわけではない  
(Jenkins 2006: 91-93)。

本論では、K-POPを具体的な事例として、送り手と受  
け手であるファンの女性たちの相互作用に焦点を当てて論じ  
る。二〇一〇年前後のK-POPブームは、韓国政府の支援  
政策に裏打ちされた企業努力の成果として語られることが多  
い(高橋 2014: 127)。その一方で、ファンたちの自発的で草  
の根的なファン活動の帰結であるとも考えられてきた。特に



図1 BTS (防弾少年団)メンバーの誕生日を祝う地下鉄電光掲示板広告(撮影: Miya 2017年8月12日オリンピック公園駅 [ソウル特別市松坡区])

女性ファンたちは、自分たちが応援するアイドルの自主的な支援活動に熱心で、地下鉄駅の電光掲示板(図1参照)やラッピングバスに応援広告を出すことが一般化している。近年ではこうした広告目当てに渡韓する海外ファンたちも多く、人気アイドルの誕生日が近づくと詳細な地図が拡散される。一方で、ファンの女性たちはアイドルに献身的に尽くす一方で、時には送り手やアイドルを対象とした集団抗議運動を行う。こうした女性ファンたちと、送り手との相互依存的な関係が現在のK-POPの興隆と限界を作り出してきたと考えられる。

## 2 文化産業と闘争する少女たち

### 2-1 サブカルチャーに根ざした抵抗性

まず、K-POPの女性ファン文化の発達過程を振り返りたい。源流は一九九二年にデビューしたソ・テジ・ワ・アイドゥルのファンたちにある。ソ・テジ・ワ・アイドゥル